

アサリ稚貝確保に向けた技術開発

【はじめに】

アサリは日本人にとって非常になじみ深い食材ですが、この30年間に漁獲量が減少し、全国の漁獲量はおよそ2万3千トン、かつての8分の1程度となりました。現在は、国内需要を満たすため、輸入に依存する傾向が見られます。

北海道においても、2006年頃まで1,500トン前後

で安定した漁獲量が見られましたが、近年では1,000トン程度まで落ち込んできています（図1）。アサリ漁業を安定化させるため、各浜では資源管理や稚貝移植などの取り組みが行われています。近年の新しい取り組みとして、アサリを垂下養殖する事例が見られ始めました。この垂下養殖では、アサリの安定生産や高品質化などが期待されます。しかしながら、アサリの垂下養殖を行うためには低コストでかつ安定して稚貝を得る必要があります。栽培水産試験場では、種苗放流による資源造成を目的として0.5mmの人工種苗生産技術の開発を行ってきましたが、今後は垂下養殖を見据えて大型稚貝の確保に係る技術開発も行っていく必要を感じています。そこで今回は、稚貝確保に向けた予備試験の結果について報告します。

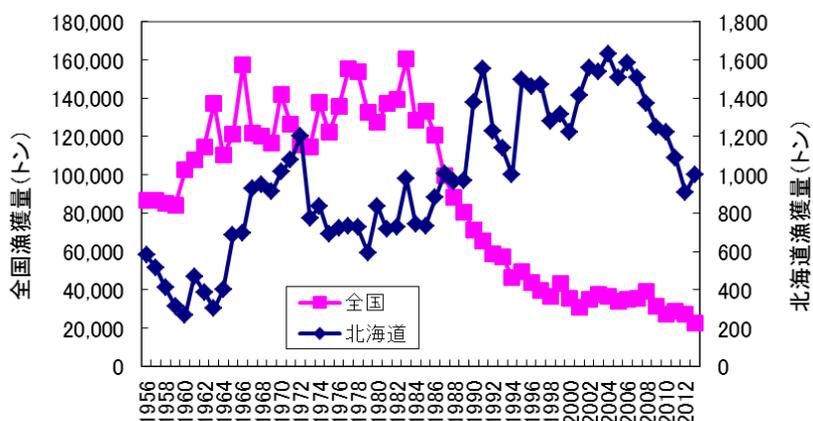


図1 アサリ漁獲量の推移

【天然海域を利用した中間育成】

2013年7月8日に、平均殻長1.3mmの人工種苗1万2千個体を砂利とホタテガイの貝殻片と一緒にラッセル袋（40×60cm、目合：4mm）に入れ、有珠湾のアサリ漁場へ設置しました（図2）。これを翌年5月16日に回収したところ、932個体の稚貝を確認することができました（図3）。平均殻長は12.7mmから13.4mmでした。稚貝を入れずに設置した袋の中には、回収時にも稚貝がいなかったことから、回収できた稚貝は人工種苗だと考えられました。同時に、ほぼ同数の死殻も確認できました。ほとんどの死



図2 中間育成の様子



図3 中間育成により得られた稚貝

殻には穴が開いており、また、袋の中にオウヨウラク（アッキガイ科の巻貝，二枚貝に穴を開けて捕食する）がいましたので，捕食されたことにより死亡したと考えられました。天然海域における稚貝の中間育成は有効であることがわかったのと同時に，外敵生物駆除などの定期的な手入れが必要であることを痛感しました。

【造成礁における人工芝を利用した天然採苗】

2014年4月21日，サロマ湖の赤川地区アサリ造成礁第4工区へ，天然採苗を目的として人工芝（30cm×30cm，毛足4cm）を設置し（図4），これを同年10月24日に回収しました。およそ6ヶ月間の設置でしたが，人工芝の毛の中にアサリ稚貝を見ることができました。人工芝5枚を回収したところ，367個体の稚貝を得ることができました（図5）。平均殻長は14.5mmでした（図6）。そのほか，オオノガイやホトトギスガイが確認できました。人工芝の中に，いつ・どのサイズでアサリが入り込んだのかはわかりませんでした。人工芝の中に，いつ・どのサイズでアサリが入り込んだのかはわかりませんが，定期的な調査を行うことで，より効率よく採苗できると考えられます。



図4 人工芝の設置



図5 天然採苗により得られた稚貝

【今後の課題】

北海道は第7次栽培漁業基本計画の栽培技術開発推進種にアサリを追加することを検討しています。また，道総研水産研究本部では，2015年度より「漁港の静穏域を利用した二枚貝等養殖技術開発プロジェクト」を立ち上げ，その中でアサリの垂下養殖の技術開発を行っていくこととしました。垂下養殖や種苗放流による資源造成を行うにあたり，効率よく大型の稚貝を得ることが必要です。天然資源が活用できる

では効率の良い天然採苗により，活用できないところでは低コストで安定的な人工種苗生産により，稚貝を確保していくことを検討しなければなりません。今後も水産試験場では，垂下養殖技術の開発だけでなく，稚貝確保に関する技術の開発に取り組んでいきます。本試験は，いぶり噴火湾漁業協同組合有珠支所，サロマ湖養殖漁業協同組合及び胆振地区水産技術普及指導所並びに網走東部地区水産技術普及指導所の協力を得て実施しました。

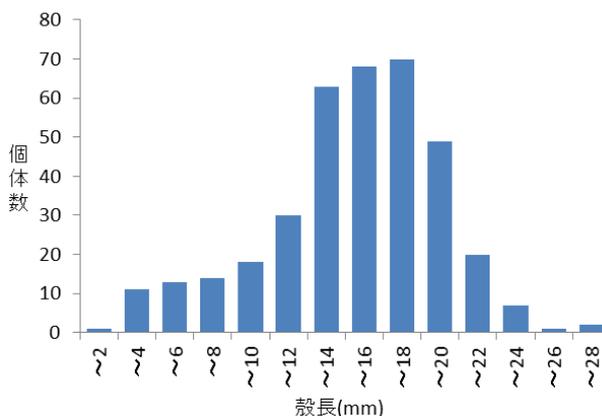


図6 天然採苗により得られた稚貝の殻長組成